冬

二年

画数 5
筆順 ノ ク 夕 冬
オン トウ
クン ふゆ

成り立ち

〝下むきの足〟のかたちをあらわした〝夕〟と、〝こおり〟の中にあるすじをあらわし、〝こおり〟のいみをあらわした〝冫〟とをくみあわせてつくった字です。

「足でこおりをふみつけるきせつの〝ふゆ〟」をあらわしたものです。

〔下向きの足は〝下る〟意味で、「氷の凍る季節に向かう」意味を表し、〝ふゆ〟の季節を表したものである。〝冬〟の〝冫〟は、〝凍〟の〝冫〟で、〝二水〟と言い〝氷〟の意味に用いる。〝冬〟の音トウは〝凍〟によったものである。〕

使い方

▽「冬きたりなば、春とおからじ」といって、さむい冬も、そうながく、つづくものではありません。かならず春がめぐってくるのは、ありがたいことです。

▽おかあさんは冬がきらいですが、ぼくは冬が大すきです。お正月があるし、ゆきがふるとゆきがっせんをしたり、ゆきだるまをつくったりして、あそべるし、スキーもできます。スケートもできます。ぼくは冬がくるのが、まちどおしいです。

▽はたけをたがやしていたら、冬眠中のへびが出てきました。

▽厳冬期のゆきかきは、ほんとうにたいへんでした。

熟語例

▽冬至（冬の至り、といういみで、昼がいちばんみじかく、夜がいちばんながい日。『冬至にかぼちゃをたべると、ながいきする』と、いわれています。）

▽冬眠（へびやかえるなどが、土の中などにもぐって、眠りながら冬をこすこと。）

▽厳冬（冬の、さむさが厳しいころ）

当

二年

画数 6
筆順 丨 ⺌ 当 当 当 当
オン トウ
クン あ＝たる＝てる

成り立ち

もとの字は〝當〟で、りっぱな〝いえ〟をあらわした〝尚〟と、〝田〟とをくみあわせた字です。

ひろい田んぼをもっている〝いえ〟はりっぱです。いえのりっぱさは、田んぼの大きさに〝あたる〟ものですから、〝あたる〟といういみをあらわしました。〝相当する〟〝相応する〟といういみです。

いまの字は、手のかたちをあらわした〝ヨ〟の上に、〝小〟がありますが、これは〝小石〟と見てください。「小石がとんできて、手に〝あたる〟こと」をあらわした字と見ることができます。

〔音のトウは〝尚〟の訛ったものである。子供が「行きましょう」を「行きまとう」というのと同じ。〕

使い方

▽ボールをなげたら、きょうしつのまどに当たってしまいました。

▽きょうは、お花に水をやる当番の日です。あさ早く学校へいって、赤や青のきれいな花に、たっぷり水をかけてやりました。

熟語例

▽当番（じゅんばんにうけもつしごとの番に当たること。）

▽当選（選に当たること。選挙で選ばれること。「がっきゅういいんに当選した」などといいます。）

▽当然（〝当前〟ともかき、〝当たり前〟ともよむ。だれがかんがえても、そうだとおもうこと。「あれでは、おとうさんがおこるのも当然だ」などといいます。）

▽正当（正しくて、当然なこと。対「不当」）

▽適当（ていどや、ほどあいなどが、ちょうどいいこと。「このおゆのおんどは、適当だ」などといいます。）